

ぐるんぱ mail

2019年3月 第16号

発行 きのくに子どもNPO

どう見られてる?
どう思われている?



あなたが とらわれているものは 何?

ぐるんぱのママ達で座談会を開き、最近気になっていることについて聞いてみたところ、子育て中のしんどさなど不満が噴出しました。そのしんどさはどこからくるものなのか、掘り下げて話し合う過程で、たくさんのママ達が、「ママなのに」「女なのに」「良いママでいなくては」「ママとはこういうものである」…等、世間の目を意識して辛くなっているのではないかと考えるようになりました。同様にパパ達の中にも「男なのだから」といった考えが根強くあると感じました。ママ・パパ達がとらわれているものって一体なんなのでしょうか…





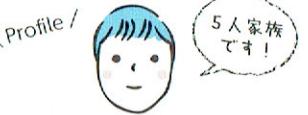
子育ての大変さには色々あるけれど、「パパだから」「ママだから」ひいては「男だから」「女だから」ということにとらわれて、息苦しくなってしまっているところはないでしょうか。そこで私たちは、色々な考え方を持つ方にインタビューを行い、ジェンダーについて掘り下げて考えてみることにしました。

* ジェンダーって何？

身体の特徴など実際の性別の違いではなく、社会的・文化的につくられた性差のこと。つまり「男のくせにめぞめぞして」「女のくせに料理もできない」「男は仕事、女は家事育児」「男はこうあるべきだ」「女はこうあるべきだ」など、古くから固定観念のように考えられている役割・思考・行動・表象全般のことである。



専業主夫を選択したパパさんに聞いてみました



葛城 勝彦氏

1 いつから専業主夫をしていますか？

8ヶ月前からです。それまでは歯科医として勤務していました。子どもが生まれてから「仕事は10年後、20年後でも出来るが、子育ては今しかできない。子どもと関わる時間を持ちたい」と考えるようになり、夫婦で話し合い専業主夫になりました。家事は独身時代からしていたため抵抗はありませんでしたが、改めて妻に教わりました。

私は、夫婦2人共が雇われの身であることは、経済が落ち込んだ時等にリスクが高いと考えています。どのような状況になっても2人とも仕事も家事育児もできるようになっておいた方が良いのではないかと考え、余裕がある今のうちに期間限定の専業主夫をしようと思いました。

2 男女の役割についてどう考えていますか？

私の両親は共働きでしたが、父と母が同じぐらいの時間に帰ってきた時に父はのんびりビールを飲んで過ごしているのに対し、母は忙しく食事の支度や家事をしている姿に違和感を持っていました。確かに男性の役割、女性の役割という考え方があると「男性が働き、女性が家を守る」という形をひとまず選択できますが、それに縛られすぎるとそれ以上何も思考しないので、最良の選択ができないこともあるし困った時に対応できなくなる部分もあると思います。大切なのは、夫婦がお互いに持つて「男性の役割、女性の役割」に対する価値観に気づき、話し合うことが大事なのではと思います。

3 仕事や子育てについて男性から見た時、どんなことが大変ですか？

共働きをしていた時は、子どもが熱を出す度に妻とどちらが休むかについて揉めていました。私が休むとなった時、その旨を上司に言うと了承はしてくれましたが「男やろ、それは女性の役割やろ」と思われているのではないかと考えてしまう事もありました。実際はそうではなかつたのかもしれません。旅行で休暇を取る時の方が気持ちが楽でしたね。

4 周りの反応はどうでしたか？

妻は後押ししてくれました。しかし私の両親からは反対され、未だに理解を得られていません。確かに親の世代は高度成長期であり男性の役割、女性の役割がはっきりしていることで経済的にはうまく回っていましたが今の時代果たしてそれで良いのか…と考えた時、夫婦共に仕事も家事も育児も出来たほうが良いという考えに到りました。

5 どんな時に育児ストレスを感じますか？ また発散法は何かありますか？

次男は私と性格が似ているので、良く喧嘩をします。言うことを聞かない時はどうしてもイライラしますね。でも後で冷静になって振り返ると、「なんでこんなことで怒ったのだろう」と気づき、反省します。私はお酒を飲むのが好きなので、家族で食事に出かけた時にお酒を楽しむことでストレス発散しています。

6 最後に子育てに対する考え方をお聞かせください。

元々の仕事はルーティーン要素が強かったため、子育ては親の思うようにならないクリエイティブな経験ができる面白いなあと感じています。今は日に日に変化する子どもの成長を楽しんでいます。

インタビューを
終えて…

●今回、特に印象に残ったのが「仕事はこの先数十年あるけれども子育ては今しかない」と言われたこと。専業主夫を選択したことでも葛城さんだからできる考えではないかとはじめは思いました。でもインタビューを進める中でそれが特別なことではなく、ただ自身の家族と自分たちらしい生き方を模索した結果に過ぎないのかも知れないと思いました。

●男性の役割、女性の役割を性別で決めてしまうのは損をしてる気持ちになりました。夫妻がどのような状況になっても、お互い家事育児仕事が出来た方が家族というチームとして無敵だなど…。マイファミリールールを夫と話し合つてみたいです。世間や他人の意見に流されるのではなくて、パートナーや子どもの意見を聞きながらお互い歩み寄つていいける家族になれたらしいな。



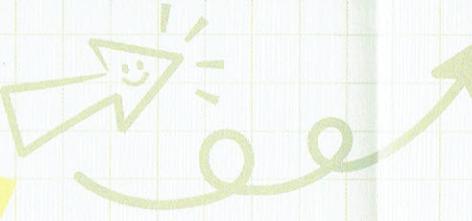
interview



その先に、夫婦別姓

多方面で活動し、ふたりの子どもを育てる松永さん。

夫婦別姓を選択した背景にあった過去や思いをたくさんお話してくださいました。



姓への理不尽さを感じたのは、小さいころから間近で見えていた両親の夫婦関係だったそうです。関係は良好ではなく、喧嘩する姿をみることもしばしば。なのに、結婚しているために母は父の姓を選択して生活している。そのことに、子どもながら強い違和感がありました。

いつの頃からか、松永さんのもつ結婚への価値観は、「結婚に幻想は持たない」「夫婦という言葉を過信しない」など相手へ過度の期待をせず、自分に軸をもつというものになりました。

働きはじめてからも、姓への理不尽さが社会に強くあることを感じました。入籍によって姓が変わらない男性社員は、1年が経過しても結婚した事実が知られていない反面、離婚した女性社員は次の日から姓が変更され、周りはあれ?と気付く。姓によってあらわになるプライバシーへの配慮が、男女であからさまに違うことに納得がいかなかった、と話してくれました。

転職を機に、独立。個人事業主になると社会保険料や各税金の支払いが大きな負担になりました。その対策に、現在のパートナーとうっかり入籍し、結婚。パートナーの姓になった自分が、本当の自分ではないような感覚を覚えたそうです。あなたの姓を背負う責任は持てない、という想いがありました。

Profile

松永久視子さん



大阪で結婚し、出産を経て和歌山へ移住。和歌山に引っ越ししてきた人たちのコミュニティ「転勤☆ズ」の立ち上げから活動をスタートする。男女の平等を考える団体「和歌山イコール会議」、「安保関連法に反対するママの会」に参加している。生き方の選択肢のひとつとして、夫婦別姓を選択している。

当時、司会業という仕事柄、活動名(芸名)で旧姓を名乗り、そのままの自分を保つことができました。でも、健康保険証など戸籍に関係することは、パートナーの姓で生きる自分がいます。自分は自分なのに、二重生活を強いられている。松永さんにとって苦しい想いがどんどん積み重なっていました。

そんな中、夫婦別姓の友人夫妻が身近にいたことや、前々から情報や知識として知っていた夫婦別姓という選択について考える機会が多くなっていったそうです。夫婦別姓後の財産分与など、子どもたちにマイナスになることがないよう、知り合いの弁護士さんに相談したりしながら、入籍10年目にペーペー離婚(事実婚)しました。

夫婦別姓後、結婚前の自由になった!と話したときの松永さんの笑顔が印象的でした。

松永さんの○○は○○

ここからは、松永さんのいろんなエピソードや想い、物事の捉え方などをみなさんにお紹介したいと思います(^^)/

想い

わたしはわたし!

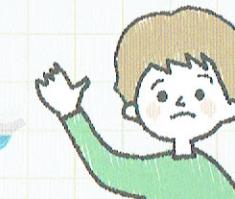


結婚し入籍すると、名前が人生の途中で変わってしまう。私は何も変わらず、今までと同じ「わたし」なのに。夫の姓を名乗り、今まで生きてきた「わたし」を表現する「名前」を変えることに「ちょっと違うかも」と思った。私は「わたし」を大切にすることで、他人との関わり方にも変化があった。

子育てに対して影響があった。子どもに、自分がしてほしいことや価値観を押し付けのではなく、この子はどうしたい?何を考えてどう動く?など、子どもの意志や選択を一步下がって見ることができた。子どもは子どもなりに考えて動くのだから、宿題があまり進まないことも、テストの点も、学校へ行くか行かないかということも、自分で選択して答えが出るまで見守る姿勢でいる。子どもは子ども。わたしはわたし。この子を産んだ親としての責任はもちつつ、育てている。

想い

ぼくらは家族??



あるとき次男が、パパとママは名前がちがうから、ぼくたちは家族ではないのか?と松永さんに聞くことがあった。松永さんは、次男が知る家族の定義とはまた違う、家族の定義を伝えた。「パパとママは姓が違うけど、夫婦だよ。二人から生まれた子どもたちがいて、4人で家族だよ。名前が一緒とか、違うとか、全然関係ない!ママは、松永久視子として産まれたから『まつながくみこ』なの。」と、伝えると次男なりに納得したのか、それ以来、両親が違う姓であることや、夫婦別姓の家族という形への不安を話すことはなくなった。

想い

夫は他人!?



想い

グレーはホワイトに!



松永さんの話を聞いて気がついたこと。
自分はグレーだったんだなということ。

自分に聞わる全ての事に対して
何かを思ったり、感じても声をあげてこなかっし
上手く伝えられていませんでした。

インタビューを終えて

そんな自分を急に
変えることはできないけれど、
まずは同じ気持ちの人を見つけてみることから
始めたいと思いました。

— 男は仕事してなんぼ。

不平不満も言わない。

泣かない。家族を守る。 —

良い意味でも悪い意味でも、夫はそう育てられたそうです。結婚して子どもが産まれたら責任感が強くなると。

子どもが産まれて半年の頃に、夫自身の仕事が辛そうでした。家族の為に仕事が辛くて頑張っていたのだと思います。結婚して子どもが産めたら生活の為、家族が困らないように辛くても我慢…? それってどうなのかなと思いました。

夫が家族の為だけに頑張ってるのならそれは違うなと思います。男だから大黒柱だから頑張らないといけない? どれだけ辛くても家族の生活の為に定年まで勤めるのが男の役割? 私が男性なら想像しただけで逃げ出した

ママに聞く「私の体験談」



くなる世界です。すごくしんどくて重荷です。

しんどかったら仕事変えたら?と伝えると夫は私の言葉に驚いていましたが内心ホッとしたのだと思います。夫が仕事を辞めて三ヶ月間位、育児をしたりゆっくり過ごしました。その後、夫が転職先を探して再スタートを切りました。

こう書くと、私がすごく理解のある妻のようですが、それも違います。夫は私と結婚したこと以上に我慢しないで夫は夫の人生を生きてほしいだけなのです。

私も夫と結婚したけど私は私でいいし私の人生です。愛する我が子も自分の人生を生きてほしいです。みんながそれぞれ生を全うして生きていくらと強く願っています。家族の幸せは私の幸せ ➡ でもそんなに重く受け止めないでねと思います。 ばんどうさぎ

自分らしく生きる。

“男性”として育ってきた事の違和感に悩み
現在は中学校の女性教師として
チーム紀伊水道^{*1}の理事長としてご活躍の
倉嶋麻理奈さんにお話を伺いました。

チーム紀伊水道 理事長
倉嶋麻理奈さん



性の違和感

小学生高学年の頃、カルーセル麻紀をテレビで見て“すごくきれい！”と見入っていました。“男の人なのにこんな綺麗になれるの？！”って。でも両親は「親不孝な人や、せつかく男に産んでもらったのに」「世間の恥さらし」と、否定的。“きれい”とか言ってはダメ…と気持ちを封じ込めました。

また、その頃不眠症でなかなか寝れない状態に。自分が学校で可愛いなと思う女の子に、布団の中で一体化する…その子になるイメージをすることでホッと安心して寝つくことができる。そんな時期もありました。

大学生になり親から自立してきた頃、本屋でニューハーフの本を見て不思議な気持ちに…。男性を満足させるための本なのに、自分は一体化していることに気づき、閉じ込めていた気持ちが煙のように立ち上ってきました。

女性として生きていく決心

30代になって女装クラブへ通いました。教師ですし、結婚をし子どももいましたので気持ちの葛藤がありましたが…。

女装とメイクをした自分を見て、綺麗だと思いました。みんな帰る時にはメイクを落とし、スッキリして男社会に戻っていくように感じるが、自分はメイクを落としたくない…ここも私の居場所ではないのかも…と、足が遠のきました。

メイクした姿が本来の姿、と思った私は1人でメイクを楽しんでいました。隠し続けてきたけれど、だんだんと感情が抑えられなくなってしまった…私と同じような思いで生きていた先生(県外)がいる事を知り、その人と人権教育の場で出会いました。その後、和歌山でも探し、“チーム紀伊水道”的創設者の人と出会いました。

15年ほど前の学期明けに、勤務先の学校へ思い切って女装で行きました。
その日は子どもからの質問攻めにあいま



したが、10日もすれば質問もなくなりました。大人達からはいろいろと言われたけれど、子どもたちが受け入れてくれるんだからOK！その頃の私は、そうしなければ、私自身が生きていけないと感じていました。

性にとらわれない子育て

私は女性の教師として生きていきたかった。姿・形は変わったけれど、生き方を変えたつもりはないです。本来の自分になっただけと思っています。男の教師だった頃を知っている子どもたちから、“今の先生の方がずっといい！”と言われます。イキイキできているのでしょうか。

「女性らしくしなければ…」「女性がやるべきだから…」という考えはとってもしんどい事。“自分だったらどうするか”ですよね。楽な生き方=サボるではなく、楽な生き方=自分らしい生き方、だと思います。子どもを産むことは女性にしかできませんが、他の育児については女性にしかできない役割ではありません。時代も環境も大きく変わりました。私たちは高度に進化していく生き物なんです。自分らしく生きるために、知恵を使って生きていかなければなりません。

子育てもそう。“男の子だから”“女の子だから”と決めつけるのではなく“一人の個”として向き合い育ててほしいと思います。「男の子なのにおままごとが好き」「女の子なのに走り回ってる」など、無意識に“性別”的にはめようとしていませんか？その時その時の子どものありのままの姿を肯定してあげてください。“その子らしさ”を認めてあげてください。無意識に“男なのに”“女なのに”と思ってしまうこともあると思いますが、気づいた時、ふと立ち止まって振り返り、考えてみてほしいと思います。

そして、子ども達が自分のことを肯定し、自己実現して生きていくようにならうと思います。

未来へのメッセージ

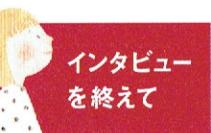
性別違和感を持った人たちは、社会から否定され、その自分を自分で否定し、夢の実現から離れていきます。不登校や引きこもりになったり…私が女性として生きていきたいと悩んでいた頃、「私が私らしく生きて社会にとって何が問題なの？」と心が叫んでいました。みんなが自分らしく生きられる社会を作っていくためには、たくさんの人の意識改革が必要です。

たくさんの人の意識を変えるということは、容易なことではありません。例えば、法律を変える、など社会のシステムを整備することができれば、人々の意識は大きく変わっていくでしょう。タバコがいい例だと思います。法律で規制



の動きがあり、社会の意識が大きく変わったのではないでしょうか。

教師として学生と関わる中で感じることは、今の若い子



インタビューを終えて

倉嶋さんがトランスジェンダー^{*2}であることは、倉嶋さんを形成しているたくさんの要素の1つでしかないということ。彼女は子どもの成長を見守る一人の教師であり、楽しいジョークも交えながらフランクにいろんなお話をしてくれるとても魅力的な方でした。トランスジェンダーであるということは、彼女について語る上で、きっととるに足らない事実なんです。セクシュアルマイノリティ^{*3}の人が特別視されず、普通に暮らしていくよう社会の理解が必要だと感じました。

子育て世代の私たちにもいろんなヒントをいただきました。性別で育てるのではなく、“一人の個”として育てる話を聞き、改めてその子らしさを尊重した子育てをしたいと思いました。そして、性にかかわらずこれから何かに“あれ？”を感じた時、立ち止まって振り返り見つめなおせる自分でいたいと思いました。

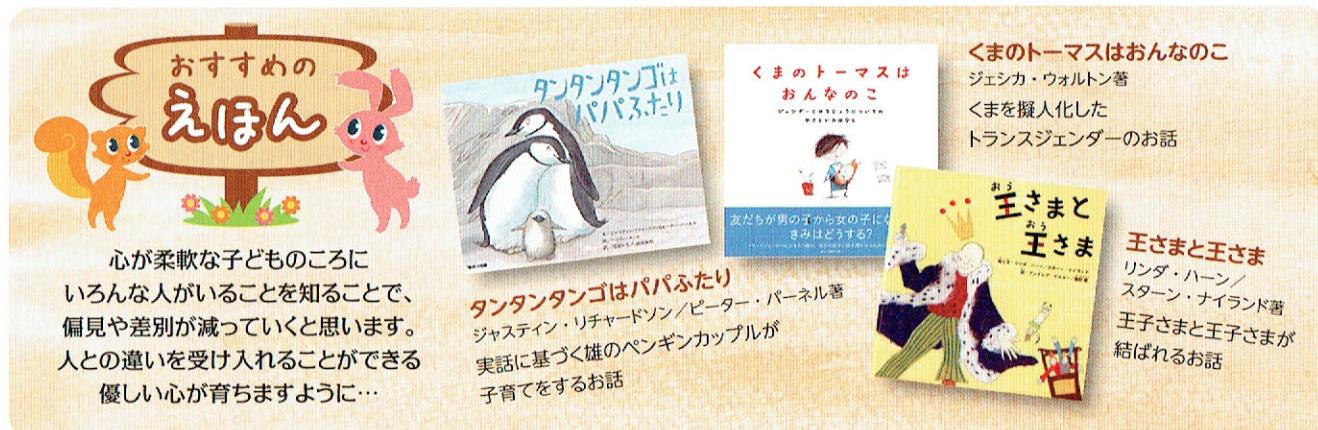
は自分が何者なのか、どうしたいのか、考える機会がないままきている、ということ。そこを考える力を大人たちが見守り、尊重してあげてほしいと思います。

子どもも“一人の個”、そして私たち自身も“一人の個”。周りから自分がどう見られているのだろう…みんな同じような子育てをしなければ…など不安になることもありますが、“自分自身を生きる”“自分らしく生きる”ことで周りの目を気にする必要はないと思いました。

みんなが自分らしく生きられる社会を作るためには、たくさんの人の意識改革が重要！というお話では、法律が変われば…とありました。ですが、子育てにも言えるかもしれません。なかなか育休が取れない！という現状ですが、法律で“育休を〇ヶ月取ること”など権利が保証されれば取れる方も、そういうものだという意識になっていく気がします。

子育てに追われる中、目の前にあるやらないといけない事でいっぱいいっぱいの毎日ですが、今回のインタビューがきっかけで視野を広げて考えることができました。

※1 和歌山県を中心に活動する、セクシュアルマイノリティ(性的少数者)とセクシュアルマイノリティを理解したい人のためのグループです。※2 生まれ持った身体の性別とは異なる性別で社会で生きている、または生きていきたい人。※3 性的少数者のこと。LGBTQなどと表す。L、G、B、T、Qそれぞれ表しているセクシュアリティが異なります。



今回のテーマについて

夫婦で話し合ってみました

妻 専業主夫をされている方の記事を読んでどう思つた？

夫 雇われの身であることはリスクが高い～というところはピンとこないけれど、考え方自分と似ていると思ったよ。

妻 確かに人生があるかないか分からぬし、2人共仕事も家事育児も出来ればいざという時に心強いよね。パパは、専業主夫になりたいって思う？

夫 自分は仕事している方が性に合っていると思う。世

間の目もあるし。

妻 世間体とかは置いといて、純粋に専業主夫になることを考えるとどう？

夫 子どもと一緒にいる時間が長くなる分、成長も見られるしやってみたいなとは思うよ。家事も嫌いじゃないし。

妻 (うなずきながら、聞いている)

夫 完全に仕事を辞めて、っていうのは想像しづらいけど会社によっては男性が育休を取れるところもある

よね。うちの会社はまだまだで、最近になって男性が育休を取る人が増えてきたけどブランクが出来ると復帰した時のギャップに苦しんだり、昇進に影響したりするから取るとしても2週間～1ヶ月の人が多いよ。

今の仕事にプライドもあるし、今の会社に就職した以上はまず仕事、になってしまるのが現実かな。どんな仕事にも責任はあるし、それは男女や雇用形態は関係ないと思う。

妻 ブランクが出来ることで社会復帰が大変になると、パパは育休を取れる環境であったとしても躊躇すると思うし、子育てに関わる時間がどうしても少なくなってしまうよね。ママが育休を取れる体制が整っていない会社もまだ多いと聞くし、育休が取れて復帰出来たとしても身内や第三者の手助けがないと仕事を続けられないって話も聞く。

日本は“男性が働き、女性が家を守る”という認識がまだまだ強いと思うな。個人はもちろんだけど、社会全体の考え方が変わっていかないといけないね。

じゃあ、夫婦別性についてはどう？

夫 このテーマは難しくてこの制度を使ったらどうなるかが分からなかった。自分の名字が変わることに抵抗はないけど。

妻 なるほど。このテーマは今の日本だとどちらかと言えば女性の方が関係あるだろうな。私は結婚して名字が変わった時、最初は違う自分になったようで違和感があったけど、慣れてくると新たな自分の人生をスタートできる感覚があって嬉しさもあったかな。でも姓名がその人の人生の象徴になるわけだし、旧姓 or 新姓が選択できることは良いことだと思う。そしたら、

最後に LGBTについての記事はどう思った？ そういう生き方があるって良いと思う。中高が男子校だったけど、Gay の人はいたね。でもその人はその人だし。この記事を読んで、当事者はこういう感覚なのか～と理解できた。

私も同じ考えだな。私は LGBTの方と関わった経験はないけど、最近 YouTube で LGBTの方のチャンネルを見ていて。いくつか見ているけど、共通しているのはどの方もイキイキしているなって。理解してほしいというより、“こういう生き方もあるよね”ということを動画を通して伝えたいのかなって感じたよ。

夫 一人ひとりが自分の世界を持っているのだから、それが否定されない世の中になれば良いなと思う。

妻 そうだね。子どもたちが大人になる頃にはそんな日本になって欲しいな。そのためには自分たちに何ができるか考えていくといいね。

感想

夫婦座談会という形で記事を書くことになり、こここのところ日々の忙しさで夫婦の会話の時間が減っていたので、久々に長い時間話し合いをしたなあと思いました。それぞれのテーマが深いので、話し合いがどう展開するか予測がつかず、それを文章化する作業

もとても難しかったですが、とても有意義な時間が持てました。話し合いをする中で、夫婦の絆もより深まった気がします。



(ペンネーム) ぴあの

編集後記



子育てってこんなに大変なの!? 思い通りにはいかない育児の連続…。子どもが寝ている時間に在宅で仕事をしていることもあって毎日があつという間です。子どもの笑顔と成長が何よりも嬉しい反面、自分のための時間が激減(T_T) 趣味の時間はほとんど取れないし、友達ともなかなか会えない! 自分の中の何かが消えていくような感覚になる時があります。リフレッシュできる時間がほしい! 1日30分だけでも自分の時間が欲しい〜! 子どものために頑張りたい、と思うけれど「私がやらしていること」って子どもにとってもいいことなのでは?! 今回、色々な考え方を持つ方にお話を聞きしてハッとした。それにしてもやらしさって何だろう…日々の生活に追われバタバタしていることも私らしいといえば私らしいし…でもこのままでは時間があつという間に過ぎてしまう! 今の生活を変えなければ自分から動かなくては! まずは、気を使って夫に言えていなかった“もう一步”本音を言ってみるところから始めてみました(^^) 夫にも自分の時間を持っていてほしいし、私もその時間を少しでも作りたい。「できない理由を探すのではなく、できる方法を考えよう!」をモットーに試行錯誤しているところです。(松)